

リンゴ新品種 ‘ほおずり’ の主要特性

松 野 英 行・佐久間 宣 昭・國 澤 高 明・山 家 弘 士

(福島県果樹試験場)

Characteristics of a New Apple Cultivar “Hoozuri”

Hideyuki MATSUNO, Nobuaki SAKUMA, Takaaki KUNISAWA and Hiroshi YAMAGA

(Fukushima Fruit Tree Experiment Station)

1 は じ め に

福島県はリンゴ栽培地帯の中では比較的温暖な地域にあり、従来から導入されている栽培品種では着色が不十分になりやすいなどの理由で商品価値が下がることがある。そこで福島県の気候に適した、品質及び外観の優れた中晩生品種を目標に、新しい品種の開発・育成を進めてきた。

‘ほおずり’ (旧系統名: 福島リンゴ1号) は1996年に新品种として登録され、今後県内での普及が期待できる。そこでこの品種の特性を報告する。

2 育 成 経 過

1979年, ‘ふじ’ の自然交雑実生50個体から, 1985年に結実した5個体について3年間果実品質調査を行った。このうち1個体の品質が優良と認められ, この個体に「福島リンゴ1号」の系統名を付し, 場内で引き続き特性調査を継続するとともに, 県内各地での適応性を検討するために1988年から県内4カ所で現地試作試験を実施してきた。1994年に種苗法に基づき登録申請を行い, 1996年3月に新品种として認可された。

3 特 性

(1) 樹姿は中間, 枝梢の太さは細, 節間の長さは中程度, 樹勢は中である。

(2) 熟期は育成地 (福島市) で10月中・下旬であり, ‘陽光’, ‘ジョナゴールド’ とほぼ同時期である。果実の外観は偏円形, 果皮の地色は黄緑, 着色は濃赤色で果重は300~330 g程度, 外観は ‘あかね’ に似るがより大玉である。縞は認められるが着色が濃厚なためほとんど目立たない。糖度は13.0%程度, リンゴ酸0.6%前後で酸味をやや強く感じるが, 肉質は緻密で多汁, 食味良好である。完熟果には蜜入りも認められる (表1, 表2)。生理落果は前期はなく, 後期もほとんどみられない。ウドンコ病や斑点落葉病の発生はほとんどみられない。

(3) 日持ち性は常温貯蔵 (15℃) で約2週間程度, 低温貯蔵 (0℃) ではおよそ3カ月間程度であり, 貯蔵中の食味の低下は認められない。

(4) 開花時期はリンゴとしては ‘王林’ に次いで早い品種に分類される (表3)。一方, 主要栽培品種との交配親和性は, 供試品種とすべての組み合わせで高い親和性を有

している (表4)。自家結実性はない。

表1 ‘ほおずり’ の果実品質特性

熟 期	果皮色	果 形	果 重 (g)	甘 味 (Brix)	酸 味 (リンゴ酸)	硬 度 (lbs.)	蜜入り
10月中・下旬	濃赤色	偏円形	300~330	13.0前後 中	0.6%前後 やや多	13.0前後 中	多

表2 果実品質特性の比較

品 種	調査年	収穫盛期 (月・日)	果 重 (g)	糖 度 (Brix)	酸 味 (リンゴ酸)	硬 度 (lbs.)
ほおずり	1993	10.25	323	12.9	0.62	12.0
	1994	10.11	314	14.6	0.56	13.3
	1995	10.16	326	14.0	0.66	13.0
紅 玉 (対 照)	1995	10.11	235	14.3	0.75	14.7
陽 光 (対 照)	1995	10.22	375	14.3	0.33	12.9
ジョナゴールド (対 照)	1995	10.16	410	13.3	0.46	12.8

表3 ‘ほおずり’ と主要栽培品種の開花時期
(1995年)

品 種	開花始め (月/日)	開花盛り (月/日)
ほおずり	4/25	4/29
ふじ	4/29	5/3
つがる	4/27	4/30
スターキング・デリシャス	4/28	5/2
王林	4/24	4/28
さんさ	4/27	5/1

表4 ‘ほおずり’ と主要栽培品種との交配親和性
(1994, 1995年平均結果)

交 配 親	ふ じ	つがる	スター	王 林	さんさ
ほおずり (♀)	◎	◎	◎	◎	◎
ほおずり (♂)	◎	◎	(○)	◎	◎

注. ◎は76%以上, ○は51~75%の結実率を示す。
() 内は単年度の参考成績。

4 普 及 性

福島県内のリンゴ生産地での普及が見込まれるが, 特に ‘ふじ’ が完熟しない冷涼な地域での普及拡大が考えられる。また, ‘王林’ と同程度に開花期が早く, 現在の栽培品種との交配親和性にすぐれることや, ‘王林’ にみられるようなつぼみの時期に低温障害がみられないことなどが

ら、受粉樹としての活用が期待される。さらに徹底した葉摘みや玉廻しなどの着色管理をしなくても良好な果実着色が確保されること、及び病気の発生がほとんどみられないことなど将来的に省力栽培の可能な品種として普及が見込まれる。

5 栽培上の留意点

(1) 果形がやや偏平なため外観上見劣りのする果実があ

り、摘果の際にはなるべく縦径の肥大の良好なものを残すようにする。

(2) 着色が濃厚なため早採りになりがちであり、適正な収穫時期の把握に努める。

(3) 樹勢は中程度であるが新梢の発生が少ないため、せん定の際には先刈り、切りつめを適宜行い、新梢の確保に努める。